

部分施点から見た和名抄声点本

佐藤 栄 作

0 はじめに

声点の施されている『和名類聚抄』（以下和名抄）は、平安・院政期のアクセントを今に伝える資料として重んじられてきた。『類聚名義抄』（以下名義抄）の引用や高山寺本の存在などからも和名抄に声点が差されたのは、平安後期からそう下らない時期であったと推定される。しかしながら、現存声点本の中核である京本が十巻本であるのに対して、名義抄所引の和名抄は高山寺本に近い二十巻本系であることが明らかになっている。また、高山寺本以外の現存声点本の転写時期・移声時期の新しいさが、同じく院政期のアクセントの資料とされる図書寮本名義抄や半井本『医心方』と決定的に異なっている。当然のことながら、幾度もの転写の中で、改変や誤写・誤脱も生じたであろう。

本稿では、十巻本諸本の施点状況——特に「和名」全体に声点の施されていないもの（以下「部分施点」）に注目して——から、十巻本声点間の相互関係と移声・移点態度、アクセント資料とし

ての問題点について考えてみたい。

一

筆者は和名抄声点の伝本間の関係を見る時、「部分施点」が一つの手がかりになると考える。筆者が、部分施点に注目するのは、声点の有無自体は、よほど施点率が高いか低いかでなければ、伝本間の声点の親疎を積極的に示す事柄とはいえないのに対し、転写の際の落ちによって生じた部分施点の場合は、原則として同一の落ちが独立に生じる可能性は低く、それゆえ、それが伝本間の近さ、つながりを示す指標になりうると考えるからである。

しかしながら、部分施点は、声点の落ちによって生じたものばかりではない。というよりも、声点の機能を考えると、差声の対象は必ずしも単語単位とは限らず、和訓や単語全体に差すことは絶対条件ではない。典拠があることを示すにしてもそうであろうし、語の識別・同定の場合や、語源や解釈について師説・自説を示す場合、さらに濁音標示機能に傾けばなおのことである。つま

り、資料によつては差声の時点からの部分施点Ⅱ「部分差声」^③が中心となる。

では、和名抄ではどうか。その大半が名詞である「和名」を掲げた辞書という性格と現存諸本の施点状況とを勘案すれば、全体差声が基本であつたと見てとれる。全体施点から部分施点へという流れを設定し、そこから出発してみるのが最も自然であると考ええる。また、「正しい」とされる声点の一致よりもトリッキーな声点の一致の方が、系統を推定する際に力を發揮することは明らかであるが、全体施点が基本である資料の場合、部分施点はそうしたものと類似した性格を有するといえ、しかるべき理由による部分差声であつたとしても、それが、転写や移声の系譜の目印となることに違ひはないと考える。

まずは、そもそも和名抄にはどのような部分施点が存在するのか見ておきたい。

声点の施されていない部分（落ちていると見える部分）によつて、部分施点を以下のように分類してみた。ただし、訓表記、類音表記、声点の有無がはっきりしないもの、虫損が関わるものは除いた。「Ⅱ」は次行への改行、「↑」「↓」は乱れによる前後への飛び、例はいずれも前田本^⑤）

- | | | | |
|----------|--------|---------------|---------|
| ① 踊り字 | 岐利々々須 | （上上○○平） | （巻八34オ） |
| ② 助詞「の」 | 宇倍乃岐沼 | （上上○○平上） | （巻四2ウ） |
| ③ 連語構成単語 | 平之路乃无麻 | （平上上上○○○） | （巻七18オ） |
| ④ 語形相違部 | 美於都古岐 | （上○○上上上） | （巻十76ウ） |
| ⑤ 双行部の乱れ | 比女都波岐 | （上上→○○↑○○→○○） | （巻十76ウ） |

⑥ 改行の前・後 阿布美加波良 （○○○平平平上）（巻三50ウ）

於保太加 （平平平）○（巻七2オ）

⑦ その他 久流久佐 （○○○上平）（巻十62ウ）

都知久良 （平平○○平）（巻三49オ）

右の2つ以上に該当するものもあり、また部分施点をそのまま移点したものをどう数えるかによつて数字が動くため、具体的な例数・比率を示すことは難しいが、①「踊り字」は2例、②「の」、③「連語」、④「語形相違」も少数で、⑤「乱れ」もそれほど多くはない。⑥「改行」が全体の3割程度、残りの5割程度が⑦「その他」である。

「踊り字」部分に声点が差されない場合があることについてはすでに指摘があり、これを後の段階での落ちであるとはしにくい。事実、「岐利々々須」^⑤は、現存十巻本全本で部分施点であり、当初からの部分差声であつた可能性が高い。ただし、二字の踊り字は、他には「久都々々保宇之」^⑤しかなく、そちらは声点がある。

また、一字の踊り字は、多数存在する中で声点が無いのは「迹豆々之」一例（前田本、林羅山書入本）のみであり、こちらは和名抄においては差されるのが原則であつたといえる。

②③は、差声の対象が連語全体ではなく、構成する単語であつたとすれば、そもそも部分施点として扱う必要がない。④は準拠本と今声点を付けようとする本とで、当該語の語形や表記が異なつていたため、その部分の声点を付さなかつたことによつて生じたと推定される部分施点である。③は、「馬」「鹿」に声点が施されていない例を含むが、それらはどの段階かで訓表記されたた

め差されなかった可能性があり、それが確認できれば④に含まれることになる。①④は、部分施点の原因・理由として声点資料一般に適應するケースであり、その数が少ないということは、和名抄が原則として全体差声であったことの証といえよう。

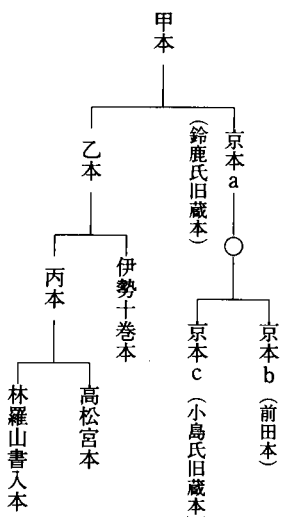
⑦は、筆者が理由を見出しにくいとして一括したものであるが、そのおよそ五分の一は「複合語の前部成素あるいは後部成素」に声点がない例で、それらは③に準ずるものとして、別立てできるかもしれない。また、わずかではあるが「動詞・形容詞の末尾拍」も含まれている。残りには、早い段階で生じたものから、現存本の書写の際のミスまで、様々なものが含まれているはずである。ただし、⑦に分類したもので現存本全本で部分施点となっている例は「乎岐牟之」一例のみである。

⑤「乱れ」は一行の字詰めが準拠本と異なることで生じた双行部分の本文の乱れによって「和名」が寸断された箇所に見られるもので、京本に限られる（小島氏旧蔵本では本文自体転写していない）。和名抄の部分施点で特徴的だと思われるのが、⑥の「改行」としたものである。和名抄の部分施点を見渡すと、改行部分と声点の有無の境界が一致している例がかなりの数にのぼることに気づく。偶然とは考えにくいため、改行が部分施点に影響したと判断した。すなわち、二行にわたって書かれた「和名」の片方の行の声点のみを写し、もう一方の行に差された声点を落としたケースと考えられる。特に、語頭の一字で改行されると、その一字の声点を見落としてしまうことが多かったらしく、そのような例が多くなっている。⁽⁸⁾ ⑤⑥は、不注意によって生じた部分施点であるといえる。

ただし、厳密に言えば、不注意は発生段階であり、準拠本ですでにミスによる部分施点となっていたものをそのまま写したのならミスとはいえないが、ここでの分類は一つにまとめた。

二

高橋宏幸氏は、宮澤俊雅氏の研究成果の上に立って、和名抄（十巻本）諸本の声点の系統を次のように推定する。⁽⁹⁾



一方、確認のために、諸本の現存巻と声点の有無を示す次の通りである。

	巻1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
鈴鹿氏旧蔵本 (京本a)	—	—	—	—	○	○	—	—	—	—
小島氏旧蔵本 (京本c)	—	—	—	—	—	—	○	○	○	○
前田本 (京本b)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伊勢十巻本	—	—	△	×	○	○	○	○	○	—
高松宮本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
林羅山書入本 (十巻本全巻を二十巻本に移声したと思われる)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

「」は現存しない巻（伊勢十巻本は、伊勢本（二十巻）の巻三、八部分である。「○」は一巻全体に声点の施された巻である。伊勢十巻本の巻三は、冒頭の2丁にしか声点がないため「△」としたが、そこまでで移声を止めたものと考えられる。続く巻四には全く声点が見えない（「×」）が、これも同様であろう。その他、諸本の詳細については、それぞれの解説等で確認いただきたい。⁽¹⁰⁾

高橋氏は、諸本を比較可能な巻五、六を綿密に検討して、先の系統を確認した。筆者も、現存十巻本の声点間の関係、施点の状況は、少なくとも甲、乙、丙の三本の存在を認めなければ説明したいという点において、この声点本間の関係を認めた。

全体施点から部分施点という流れの中で現存本の部分施点を見ると、確かに高橋氏の調査のとおり、巻五、六においては先の系統図の例外となるものはほとんど存在しないのであるが、以下のような例も見出せるのである。これらはどう解釈すべきであろうか。（全体施点を○◎、部分施点を△▽、本文無しを―、声点無しを×とする）

		京本		伊十本		高松宮本		林本 ⁽¹¹⁾	
		A	B	C	D	E	F	G	
		○	○	△	△	△	○	△	…4例
		△	△	△	△	△	△	△	…1例
		○	○	○	○	○	○	○	…2例
		△	△	△	△	△	△	△	…1例
		○	○	○	○	○	○	○	…7例
		△	△	△	△	△	△	△	…4例
		○	○	○	○	○	○	○	…6例

H △ △ △ …1例
I × △ ○ △ …1例
その他 …5例
施点の状況は表1の通りである。部分施点の方には、改行を示す「」を付した。⁽¹²⁾

全体を見渡して気づくのは、系統図に反する例に占める高松宮本全体施点例の比率の高さである。すなわち、上記A―I 27例のうち15例までが、高松宮本が全体施点であることで系統図に合わなくなったものである。27例のうち、高松宮本が部分施点であるのはわずか2例にすぎない。

ここでの高松宮本の全体施点は、他の本が誤脱した中で、完全さを保ったものといえるのだろうか。もしそうならば、先の系統図を変更する必要がある。しかし、本稿では挙げていないが、高松宮本・林本が共通して他本と異なる声点位置となっている例もいくつか存在し⁽¹³⁾、丙本の存在は否定しがたい。では、高松宮本は別本との校合等を行ったのかというと、そうした事実は確認できない。どう考えるべきか。

先に、高松宮本以外に全体施点が存在するA―D（Fは後述）を見てみる。A①②④B①は、名義抄等に同じ声点の例があり、この全体施点を院政期のアクセントの反映とみてよい。C①「おはかみ」は、医心方で（平平〇平）、名義抄観智院本で（平平〇〇）だから、第1拍（平）であることに問題はない。C②「むくめく」も同様である。D①「しきいた」は比較する他資料がない

表 1

		「和名」	部分施点	全体施点	巻
A	①	「かつをむし」	〈上上上〉〇〇	〈上上上上平〉	八
	②	「うまのくばかひ」	〈〇〇平上上上平〉	〈平平平上上上平〉	八 ⁽¹³⁾
	③	「きゑむば」	〈上〉〇平平	〈上平平平〉	八
	④	「つちすり」	〈〇〉平平平	〈平平平平〉	八
B	①	「はたあし」	〈〇〉上上上	〈上上上上〉	五
C	①	「おほかみ」	〈〇〉平上平	〈平平上平〉	七
	②	「むくめく」	〈〇〉平上平	〈平平上平〉	八
D	①	「しきいた」	〈〇〉上上平	〈上上上平〉	五
E	①	「あをむし」	〈〇〇上平〉	〈上平上平〉	八
	②	「いねつきこまろ」	〈〇上平平上上上〉	〈平上平平上上上〉	八
	③	「そふき」	〈〇上上〉	〈上上上〉	七
	④	「なまくさし」	〈〇平平平上〉	〈平平平平平〉	八
	⑤	「のむし」	〈〇〉上平	〈平上平〉	八
	⑥	「ぶちむま」	〈上上上〇〉	〈上上上平〉	七
	⑦	「ふふとり」	〈〇〇上平〉	〈平平上平〉	七
F	①	「うつむろ」	〈〇〇〉平平	〈平平平平〉(高) 〈上上上上〉(京)	三
	②	「かくかのとり」	〈上上上〇上上〉	〈上上上上上上〉(高) 〈上上上平上上〉(京)	七
	③	「くろみどりのむま」	〈平平平上平平〇平〉	〈平平平上平平上平〉(高) 〈平平平上平平平平〉(京)	七
	④	「らくだのうま」	〈〇〉平上上上上	〈上上上上平平〉(高) 〈平平上上平平〉(京)	七
G	①	「かきつばな」	〈〇〉上上上平	〈平上上上平〉	十
	②	「きたきす」	〈〇〇平平〉	〈平平平平〉	九
	③	「すひかつら」	〈上上〇〇平〉	〈上上上上平〉	十
	④	「まつのこけ」	〈〇上平平平〉	〈平上平平平〉	十
	⑤	「やまあざみ」	〈〇〇上〉上上 ⁽¹⁴⁾	〈平平上上上〉	九
	⑥	「わたたび」	〈〇平平平〉	〈平平平平〉	十
H	①	「すもり」	〈平上〇〉	〈平上平〉	七
I	①	「ぬたはだ」	〈平平〇〇〉	〈平平平平〉	七
その他	①	「くつわづら」	〈上上上上〉〇(京b 高林)	〈上上上上平〉(京a 伊)	五
	②	「につゝじ」	〈平平〇平〉(京b 林)	〈平平平平〉(高) 〈平平上平〉(京c)	十
	③	「おそきうま」	〈上上〇馬〉(京c 伊林)	〈上上平馬〉(高) 〈上上上馬〉(京b)	七
	④	「さへづる」	〈〇〉平上上(高) 〈上〇上上〉(林) 〈上〇上平〉(京c 伊)	〈上上上平〉(京b)	七
	⑤	「ひきのひたひくさ」	〈平平〇上平上上平〉(高林) 〈平平平上↑〇〇↑〇〇〉(京c) 〈平平〇上↑〇〇↑〇〇〉(京b)		十

が、「敷く」は1類動詞であるから、第1拍（上）は相応しい。

A③「きあむば」は名義抄観本に（上上上平）（上上上上平）とあり、（上○平平）はアクセントにゆれがあったことを示したものの。以上、A③1例を除いては、皆全体施点に問題はなく、当初の差声状況とできるものばかりである。しかも、A②以外全て声点の有無の境界が改行と一致しており、これは偶然とは考えにくい。筆者は、これら6例は、先に述べた「改行」による声点の落ちと考える。その場合、複数の本で同一箇所起きたとしなければならぬことが問題となるが、今は仮に「改行」による落ちの偶然の一致としておく（後述）。

一方、E以下は様相を異にする。F以外は高松宮本のみ全体差声のケースであるが、

E①「あをむし」（上上上上平）

名義観鎮（上上上上平）¹⁶

⑥「おちむま」（上上上上平）

名義観鎮・伊廿（上上上上）

⑦「ふふとり」（平上上上平）

「はほどり」和名・名義観鎮（上上上上平）

G①「かきつばな」（平上上上上平）名義図観・医心（上上上上上平）

③「すひかづら」（上上上上上平）名義図観鎮（上上上上上平）

⑥「わたたび」（平上上上平）医心（上上上上平）

I①「ぬたはだ」（平上上上平）名義観・伊廿（平上上上平）

以上のように、他資料に見えない高松宮本独自の声点が存在し、明らかな誤りとしか思われないものを含む。改行と一致する例が少ないことも、前のグループと異なる。

これらについて、できるかぎり慎重でなければならないが、筆

者は、高松宮本が準拠本の部分施点を全体施点に書きかえた（朱声点を増補した）例ではないかと考える。全体施点から部分施点という基本の流れに逆行する例となるが、高松宮本には、これを認めざるをえないのではないか。E G Iは他の例も同様であって、全体施点に問題がなくとも、結果としてそうであったに過ぎず（加えるとしても原則として上か平かなのだから誤りとはいえない声点にもなる）、高松宮本の方を「声点の落ちる前」とはできないと考える。

そうすると、F③④の例は、乙本段階で落ちた声点を高松宮本で補ったために、京本とは異なる全体施点となった例と考えられる。F①は、本来は（上上上上）であったものを、乙本で（○○平平）と誤り、高松宮本でその上に手を加えた（平上上上）とできる。F②も同様であり、その他の②③も、高松宮本で声点を増補した例であろう。

声点の増補を認めることによって、系統図の反証例に高松宮本のみ全体施点の例が多かったことが首肯できる。このことは、高松宮本の他本に見られぬ移声（転写）態度の存在と、先の系統図を変更する必要のないことの両方の確認になったと考える。なお未解決の問題として残るのは、この増補のよりどころである。先の例のように、正しい声点の理解からすれば、誤りとされるものを含んでいる。誤った理解に基づいて、自らの内省（すなわち後世のアクセント）を付したとも考えられるが、無理解のまま、単に朱を加えた可能性の方が高いように想像する。これは課題としたい。

系統図に反するか否かの判断は、三本の比較よりも四本比較の方が、より断定的になることから、四本に声点の認められる部分（巻三の2丁までと巻五・八）とその他とで、見出せる反証例の数に差が生じるのはいたしかたないことである。ところが、前章で挙げた系統図に反する32例には、それ以上の偏りが認められる。

（カッコ内は高松宮本で声点を付け加えたと推定した例の数）

巻 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
例数 0 0 1 0 3 0 11 9 2 6

(0 0 1 0 0 0 9 4 2 5)

巻三は2丁までであるから比較にならないが、巻五、六が少なく、巻七、八が多い。巻十も少なくないが、巻十は声点の施された「和名」の数が他の巻に比べて格段に多い。高松宮本が声点を付け足したと考えられることを、他に見られぬ移声（転写）態度としたが、実は、巻五、六にはそうした例が見られないのである。

高松宮本は、二巻ずつ一冊とした五冊本であるが、第四冊（巻七、八）の声点のみ他と異なることが指摘されている。第四冊にのみ線点に近い声点が多数混じり、およそ全てが星点の他巻と異なる。この線点に近い声点は、星点に比べ、ややぞんざいではない印象を受ける（注⁽¹³⁾など）。筆者の観察によれば、高松宮本の声点には二色あり、紫っぽい点は後入れであると思われる。第四冊の線点状の声点は、先に付された方に含まれる。第四冊以外の朱点が全て同筆であるかどうかははっきりしないが、第四冊の

第一次朱点は、明らかに他とは別人の手によるものである。

ちなみに本文の方は、筆者は、第一、二冊のうち巻二のみ別筆、そして第三冊、第四冊、第五冊の五筆と見る。⁽¹⁹⁾ それぞれ本文と朱とが同筆であるかどうかは確認できていないが、第四冊は、声点も本文も他の冊とは異なる手によることは明らかである。

以上から、準拠本に無い声点を加えるような転写態度は、第四冊に限られるわけではないが、丁寧な星点を打たない第四冊の移声者に強く出ているのである。

そうすると、今度は、先のAの4例がいずれも巻八であることが気になってくる。前章では伊十本・林本両本での改行による落ちとしたが、丙本段階でいったん改行の影響で落ちていたものを、高松宮本で足し、うまく復元できた例である疑いが出てくる。偶然生じた同一の落ちが、偶然に巻八に集中したとするよりも、そのように考える方が可能性は高いように思われる。

さらにこのことから、高松宮本で全体施点、林本で部分施点の例の見直しが必要となってくる。林本だけが部分施点の例は、林本で声点を落とした（あるいは一部付さなかった）としてほぼ問題ないと思われるが、諸本のうち高松宮本のみ全体施点の場合や、京本あるいは伊勢本と高松宮本とが一致しない場合には、高松宮本での増補の可能性が生じるからである。

丙本段階で高松宮本にあるように改変（誤写）され、林本で声点が落ちた（あるいは付けるのを止めた）とすれば、系統図に反することにはならないため、先に挙げなかった例は29例である。そのうち12例が、林本の声点の有無が高松宮本の改行部分に当た

表 2

	「和名」	高松宮本 (改行付)	林本	他本	巻
①	「あまのさくめ」	〈上平平上平平〉	〈〇平平上平平〉	〈〇〇〇〇平平〉(京)	一
②	「はつしも」	〈平平〉平平〉	〈〇〇平平〉	〈上上平平〉(京)	一
③	「ちはく」	〈平平上〉	〈〇平上〉	〈上上上〉(京)	二
④	「とさし」	〈平〉上平〉	〈〇上平〉	〈上上上〉(京、高山)	三
⑤	「さけしたむ」	〈平〉上平平上〉	〈〇上平平上〉	〈上上平平上〉(京)	四
⑥	「さかづき」	〈平〉上上平〉	〈〇上上平〉	—	四
⑦	「やまばと」	〈上〉上平平〉	〈〇上平平〉	〈平上平平〉(京、伊廿)	七
⑧	「ありのひふき」	〈平〉上上平平平〉	〈〇上上平平平〉	〈上上上平平平〉(京)	十
⑨	「ひめかがみ」	〈平上上〉上平〉	〈〇上上上平〉	〈上〇上上平〉(京)	十
⑩	「みそはぎ」	〈平上〉上平〉	〈〇〇上平〉	〈上上上平〉(京)	十
⑪	「かはらふち」	〈平平上〉上上〉	〈〇〇上上上〉	〈上上上上上〉(京)	十

り、丙本段階で改行によって落とした声点を、高松宮本で加えた可能性がある。先のFに準ずるものも17例存在し、声点増補を強くにおわせる。さらに、表2のとおり「血」「戸」「酒」「蟻」「姫」「河原」を(平上)、「山」を(上上)とするなど、いわゆる式保存の法則から外れる例が11例も含まれている。(高松宮本のみ改行を示す)

これらは、部分施点を全体施点に直す際に、上声・平声を逆にしてしまったケースではないかと疑われる。もちろん、準拠本(丙本段階)

の声点を林本が納得できず、声点を付さなかった可能性も残るが、これまでの検討から、高松宮本での増補の方が有力であると推定する。

先に述べたように、声点の増補は第四冊に限るものではないが、これらを増補例に加えると、先にはなかった巻一、二、四にも認めることになる。しかしながら、それでもなお巻五、六(第三冊)には見えない。少なくとも、準拠本の部分施点をどう扱うかについて、高松宮本の巻五、六(第三冊)とそれ以外(特に第四冊)とでは、姿勢に相違があったのである。諸本の系統を巻五、六で行ったのは、雑音がない点でよかったといえるが、そこをもつて、高松宮本のアクセント資料としての価値を評価しすぎてはなるまい。²⁰⁾

ここまで、話題が高松宮本の特異性・問題点に集中してしましたが、高松宮本と林本との関係について、今一度確認しておきたい。

両本の声点が系統的に近いことについては、先の図のとおりであって、変更する必要はないと考える。しかしながら、この二本には、極めて強い「個性」があるため、一致しない声点が多い。高松本の「個性」はここまで述べてきたことであり、林本は、十巻本の声点を二十巻本に移したという点である。羅山の移声作業は、「和名」の掲載順が異なるだけに、慎重にならざるをえなかったと予想されるが、語形の不一致や表記・用字の不一致などが移声の障害となったはずである。このようにして両本声点には系統上の距離以上の差が生じているのである。結果として、林本

の方が高松宮本より穏当な声点ともいえるが、丙本（あるいは乙本）段階の問題を引き継いでいることは同じであり、林本を善本とすることもできない。

四

部分施点というポイントから見ると、和名抄（十卷本）声点本には、

- ① 差声当初からの部分施点（部分差声）とそれを正確に写した部分施点
- ② 全体差声を転写・移声の際に部分施点としてしまったものとその正確な写し

③ 前段階での部分施点をさらに不正確に写したものが存在する。②には、甲本、乙本、丙本、現存諸本、さまざまな段階があり、③には、さらに声点を落としたもの、位置を誤ったもの、そして声点を加えたものがある（高松宮本）。アクセント資料としての有用度は、その時と場所のアクセントの正しい反映とできる例がどのくらい認められるかであるが、何回かの転写のうちの一回でも、心もとなない書写態度が混じると、資料の質としては格段に低下してしまう。改行が関わる——すなわち不注意による——部分施点を含む和名抄は、その点から、充分な配慮を必要とする資料といわざるをえない。何となれば、少なくともそれを犯した者（移声者）は、語を充分に確認しながら声点を付していなかったことになるからである。いわゆるアクセントの体系変化を経てしまうと、声点の意味・機能についての理解が低下

すると考えられるが、単なる朱点としか見えなくなってしまう転写者なら、このようなミス（一種の目移り）を犯して不思議はない。そもそも、京本の双行の乱れなども、和名抄を読めていれば犯すことのない誤りであり、そのような転写者の手を経たものを、われわれは院政期のアクセント資料として用いていることを自覚しておかなければならない。

注(1) 小松英雄「日本声調史論考」（風間書房一九七二）、秋水一枝他

編「日本語アクセント史総合資料 研究篇」（東京堂出版一九九八）。

(2) 本稿では、秋水一枝「古今和歌集声点本の研究 研究篇下」（校倉書房一九九二）に従って、「差声」＝「声点を差す」として「移声」＝「声点を移す」とことを区別する。また、行為ではなく、単に「声点が差されている」とことについては「施点」と呼ぶことにする。声点の機能を理解せず「声点を移す」行為については、「移声」ではなく「移点」とすべきかと思われるが、その区別は今回は行っていない。

(3) 注(2)にしたがって、部分差声と部分施点を区別する。拙稿「和名類聚抄」の部分差声について（資料篇）（神戸山手女子短期大学紀要 38 一九九五）の「部分差声」は全て本稿の「部分施点」。そのように訂正したい。

(4) 部分差声では名詞のアクセント型の識別・同定はできない（小松一九七一参照）。また現存声点本全体で同一の部分施点となっている例も極めて少数である。

(5) 注(3)の拙稿を修正した。拙稿は、高松宮本・林羅山書入本（以下林本）を加えて訂正版を出したい。以下、和名抄は、馬淵和夫「和名類聚抄古写本声点本文および索引」（風間書房 一九七三）のほか、京本は「倭名類聚抄 京本 世俗字類抄」巻本（東京大学国語研究室資料叢書13）（汲古書院 一九八五）、高松宮本は

歴史民俗博物館保管の原本、林羅山本は国立公文書館所蔵の原本による。「高松宮本・林羅山書入本和名類聚抄声点付和訓索引」(アクセント史資料研究会 一九九九 参照)。

- (6) 踊り字に声点が差されないことについては小松一九七一、秋水一九九一に言及あり。

- (7) この点に関しては、あらためて別稿を成したい。林本は、十巻本の声点を二十巻本に移したため、他本より④が多くなっている。

「あ(平)→「あぜ」(平○)、「やまのいも」(平平平平)→「やまついも」(平平○平平)等。

- (8) 注(18)参照。また、林本にとってミスの原因となるのは、自身の改行でなく準拠本の改行であらう。林本の準拠本の字詰めは、ほぼ高松宮本に一致すると考えたい。

- (9) 高橋宏幸「倭名類聚抄の声点について——十巻本第五・六巻を中心に——」(『国文学論考』31 一九九一)による。宮澤俊雅「倭名類聚抄諸本の系統推定——十巻本第三・六巻を中心に——」(『北海道大学文学部人文科学論集』18 一九八二)参照。

- (10) 馬淵一九七三、高橋宏幸「高松宮御所蔵「和名類聚抄」について」(『国文学論考』23 一九八七、小林祥次郎「和名類聚抄古活字版林羅山手沢本」(『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 一九八二)、宮澤俊雅「倭名類聚抄 京本 世俗字類抄二巻本(東京大学国語研究室資料叢書13)」解説(一九八五)。

- (11) 以下、京本は異同がある場合のみa・cを付す。また単なる高は高松宮本(高山寺本は高山)、同様に伊は伊勢十巻本(二十巻本は伊廿)の略。

- (12) 「和名」は諸本で万葉仮名の相違があるため、以下ひらがなで示す。

- (13) 高松宮本のA②第一拍とE①第二拍は、平声点としたがかなり高い位置である。

- (14) 京本cは(○○上○上)。

- (15) 高松宮本と林本とが一致する疑問声点(丙本段階の誤りか)とし

て、「血」(平)、「町」(上上)、「鳥」(平平上)、「腫る」(上上)などがある。

- (16) 他資料については、秋水一校他編『日本語アクセント史総合資料索引篇』(東京堂出版 一九九七)とそのために作成した資料による。

- (17) 高橋一九八七。

- (18) 紫つばい点は、第一次の朱点で落としたものを補ったものと判断される(詳細は別稿に譲る)。第四冊以外で星点的でないことが多い。改行の前後で声点が変わる例が十数例あり、改行による落ちがあったことを示している。増補した声点と後入れとの関係が最も気になるところであるが、両者が一致するのは2例(A④「つちすり」、E④「なまぐさし」)に過ぎず、後入れの増補ではない。しかし、後入れが見落としの確認ならば、逆に、2例の一致が不思議である。声点の増補は、現存高松宮本においてではなく、丙本と高松宮本の間の本とすべきか。本稿ではその可能性を認めつつ、それを高松宮本段階と扱い、単に高松宮本と記している。

- (19) 拙稿「万葉仮名「末」の字体をめぐる」(『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部』30 一九九七)では四筆(五筆か)とした。「也」「云」等の字形タイプから、五筆とする。高橋一九八七は、第一、二冊、第三、五冊、第四冊の三筆とする。

- (20) 丙本(あるいは乙本)段階での問題があり、第三冊も善本とはいえない。また位置の不正確な声点については、第四冊にとどまるものではなく、第三冊にもいくつも見られる。

- (21) 高橋一九八七の指摘どおり、林本の「ゆみはず」(平平○○)、「いとすぢ」(平上○○)は、それぞれ「弓」「糸」の声点であらう。これは同一項目についての語形の相違ではなく、別語の声点である。注(15)。「日本語アクセント史総合資料 索引篇」(東京堂出版 一九九七)では、高松宮本・林本の声点を全て採ることはせず、採った場合も備考に注記した。